

重源上人ちゅうげんに倣ならう

お釈迦様のお悟りは縁起えんぎの法であると言われます。縁起は因縁いんねんとも言い、この世のあらゆるものが依よって起こることの真理であり、すなわち、人一人では生きられず、あらゆるものと依存しあつて初めて生きてゆけるとの教えです。日頃、私たちがよく口にする「縁えん」という言葉には、本当に深い意味があるといえます。

さて、今回のテーマの重源上人とは一体誰だ、と感じられた方も多いことと思います。浄土宗の方ではありませんので、お耳なじみがなくて当然だと思います。今回、重源上人を取り上げるのも、私にとって何かの「縁」だと感じることがあったからです。それは、次のようなことがあったからです。去年の秋、伊藤ていじ著『重源』（新潮社刊）という小説が出版されました。伊藤ていじ氏は、大学教授であり、日本を代表する建築学の権威なのですが、小説に挑戦されたのでした。そして、取り上げられたのが、重源上人の生涯なのでした。それは、重源上人が法然上人と同じ平安末から鎌倉初めの時代に生き、江戸時代に再度再建された現在のものより、さらにスケールの大きい奈良東大寺の大仏殿と大仏とを、平氏の兵火による焼け跡から再建したからなのでした。

さて、私にとって、なにが「縁」かと申せば、昨年暮れにこの本を買って読み始め、重源上人の生き方に大いに感動している最中に、震災に見舞われたということでした。重源上人の苦勞を、時代もスケールも違ふとは言え、実際に、自ら経験するとは思ひもよらぬことでした。重源上人の生き方に倣ならうようにと、事前に多少なりとも心構えを示されていたということは、やはり何かの「縁」であったのだらうと思います。

それでは、重源上人とはどのような方かと申しますと、法然上人より十二歳年長で、真言宗の醍醐寺たいごじで出家し、僧侶の学問の五明ごみょうのうち特に工巧明くぎょうめい（建築、工芸、技術）に優れておられました。

四十七歳の時、宋の国に渡られ、臨濟宗を開かれた栄西禪師と共に五台山や阿育王山に参拝されました。宋では、法然上人の依頼により、浄土五祖（曇鸞、道綽、善導、慧感、少康）の画幅を請来され、後に京都の二尊院の経蔵に安置されたと伝えられています。ほかに阿弥陀三尊を請来されておられ、元来、真言僧でありながら、高野山に専修往生院を建て、南無阿弥陀仏とお念仏を唱えていた重源上人の人柄を偲ばせることだと思えます。帰国後、六十一歳の時、平重衡の軍による南都焼き討ちにより焼失した東大寺大仏殿の再建のため「造東大寺大勸進」となり、その財源として、人々からの「知識物（仏に結縁して寄進する財物や労働力）」を集めようとされたのでした。もちろん、京都の朝廷、鎌倉の幕府との交渉にも優れた力を発揮されたことでした。重源上人の重源は釈名で、法名は俊乗房であります。自称は「南無阿弥陀仏」といい、浄土の法を信じ、勸進する者に「阿弥陀仏」の上一字をおき、「観阿弥陀仏」とか「如阿弥陀仏」という名号を与えられました。このことだけ見れば財物を集めるのに上手であったというだけになりかねません。しかし、法然上人と天台宗など聖道門の僧が論議したという大原の勝林院で開かれた「大原談義」に参加した重源上人が、論議の後、法然上人と二人で次のような会話をされたと言います。法然上人が、「この程度の論議の所詮（しよせん）いか御心得候や」（この論議の内容や意義をどう思われますか）と、問いかけると、重源上人は、

「糺（しゆ）た瓶（びん）ひとつなりとも、執（しゆ）心（しん）とどまらんは、捨（す）つべし事（こと）こそ心得（こころえ）侍（ま）れ」（ぬかみそ入れの壺でも自分の心がこだわるのであれば、それも捨ててしまつてよい。）つまり、集めた財物が、仏物であつて私物ではないのだとのお答えに、重源上人のお心と悩みを暖かく読みとつた法然上人は、「それでも念仏往生こそ」と申されたそうです。二十数年の歳月を経て東大寺の復興は成ります。私も住職として、松林寺の復興にあつて、是非この話をいつも心に思い、重源上人に倣（なら）いと存じます。